

## 北九州産業社会研究所に採用された幸運

石塚 優

記憶が定かではありませんので、印象に残ることを書きます。北九州産業社会研究所に採用された経緯は 1985 年 4 月頃に、中途退学していたにも係わらず出身の大学院掲示板で、公募を見つけたことがきっかけでした。募集領域は確か「社会学と社会福祉、社会調査ができる人」だったと思います。地域福祉や老人福祉、社会人類学（中根千枝さんの業績で関心を持つ人が多かったと思います）等の特定の分野ではなく社会福祉や社会学ではあまりにも分野が広く、応募には悩んだ覚えがあります。とはいえ、非常勤を始めて 2 年を経過し、奨学金の返済開始まで猶予がなくなっていましたし、専攻領域としてはぴたりでしたので、指導教員の推薦状（当時は必須）をもらい、締め切り間近に応募したと思います。指導教員は公募にあまり期待していない様子でしたが、推薦状には私の講義が不首尾だった場合は代わりに講義を担当しても良いとまで書いてくれていたようです（選考委員だった教授から後に聞きました）。これに感激された選考委員の教授が強く押されたのかは不明ですが、3 ヶ月くらい後に面接の連絡が入りました。その面接の場所が、当時はそれで良かったのでしょう、私の居住する都市まで面接に出向くというのです。尤も、同じ都市に住む採用候補者二人を順に面接し、大学でもう一人面接する手筈だったことを、面接中の話の中で知りました。私の次にも予定していたようですが、私の面接時間が予定よりも超過しすぎ、次の候補者の時には疲れて気力が低下していたかもしれません。その 1 ヶ月後後に採用の連絡を受けた際は、純粹公募が期待されていなかったこともあり、私を含め周囲の人も驚いたことを覚えています。面接に出向いてこられた三人の面接官は、その日に二人の面接をこなして日帰りされたようですから、二人目の際は疲れていたこと、一人増員人事だったなど私にとっての幸運が採用に結びついたと思います。

研究所の場所は現在の都市政策研究所事務室の反対側の 1 階にあり、ガラス戸を入れてすぐに 2 人体制で事務室、隣が所長室、次に作業室、向かいに専任所員 3 人の部屋、突き当たりが資料室（現在と同じ）でした。赴任してからは少し大変でした。担当は通年科目の社会福祉論（昼間と夜間）と専門社会学（当時）で週 3 コマ（現在 7 ~ 9 コマ）でした。全学対象でしたので、受講者数は二科目で 1,500 人位だったと思います。大変だったのは、赴任した年に学生を対象とした同和問題に関する意識調査（新入生全員、同和問題論講義前と後に外国語学部の教授が実施した 3 回の調査計 2,500 人程度）の集計分析を依頼され、その後「同和問題に関する学生の意識」『同和教育関係資料』北九州大学として新入生に配布する人権教育関係資料の集計、分析、原稿を任されたことです（1987 年 ~ 2004 年）。これが募集要領の「社会調査ができる人」だったのです。当時はパソコンがまだ NEC の 9801 が販売されたばかりで 100 万円ほどしていましたが、富士通の FM7 と同様にソフトがほとんどなく、使えるのは BASIC とテキストファイルのみでした。記憶媒体はカセットテー

ブとフロッピーディスクです。その後ワープロ専用機が主流になりますが、もう少し後に、Lotus やマイクロソフトがワープロや表計算ソフトを出します。MS-DOS から WIN3.1、95、98、ME、XP へと進むに従いソフトも充実、95 に対応する高額な SPSS も発売されました。95 年頃から徐々にワープロ専用機は姿を消しました。

赴任当時はメインフレームによるコンピュータの利用が当たり前で、学生の頃はパンチカードでデータを読み込ませる方式でした。それが TSS (Time Sharing System: 端末として CRT とキーボードを接続した入出力方式) に進化していましたが、北九州大学には中型しかなく、言語は COBOL でした。Fortran と Basic を使っていた私は直ぐに対応できず、仕方なく、最初の半年は講義もなく、まだ ID とパスワードが有効だった出身大学へ出張し、SPSS と SDA (富士通が提供) というソフトを利用して集計をしました。

大変だったのは次の年からです。大学で導入した日立のワークステーション (研究所にも一台導入: 1 MB メモリー、40MB ハードディスク、5 インチフロッピー) を利用して Basic で集計プログラムを作成し、集計に取り組んだのですが、当時 Basic は一度に 100 人分しか読み込めず、テキストファイルに CSV 方式で入力した 1,200 人分全てのデータを集計するにはカウンターとサブルーチンを使い順次読み込ませ、さらにクロス集計や検定までするために要するプログラムは数千行になりました。これが 3 種類必要でしたので、2 年目はこれに掛かりきりになった記憶があります。このプログラムは毎年更新しましたが、役に立たなくなった今も残っています。上述の通り、SPSS もパソコンで使えるようになり、楽になった頃には時限立法だった同和問題関連法も変わり、人権全般へ移行する過程で学生を対象とした調査も実施されなくなりました。

この間に人口構成高齢化が進み 90 年から高齢者保健福祉推進 10 ヶ年戦略が始まる頃には各市町村が義務づけられた高齢者保健福祉計画策定のための委員会委員を周辺の市町村で務めさせていただくと共に、高齢者のサービスニーズ調査等 (90 年代前半までは集計が大変でしたが) の依頼を受けることも多くなる一方、情勢として東アジアへの関心が高まり、その関係で研究所の専任所員も 3 人から 6 人程に増えていきました。高齢化率が 14% (現在 24%) を 94 年に超えた頃には下関市立大学からはたらきかけを契機に関門地域共同研究会が設立され、東アジアと関門地域の関係を主眼とした経済分野中心の共同研究が開始されました。この当時は兼任所員として各学部の先生方が 30 人位で所員会を構成していましたので、兼任所員の先生方の協力もありました。2006 年に都市政策研究所と改称し、研究事業に参加する兼任所員制度は無くなりましたが、関門地域共同研究は当初とはテーマを変更して継続しています。

北九州産業社会研究所は地域課題研究を目的とし、94 年頃から 2000 年にかけて姉妹校であるノーフォーク市のオールドドミニオン大学やカーディフ市のカーディフ大学を訪れ、高齢化対策や高齢者へのサービス、ボランティア活動について調査をするとともに、両大学の教員や両市の職員を招いてシンポジウムを開催したりもしました。

また、88 年頃から参加させていただいた福岡県地方自治研究所での在宅介護研究会では

行政職員、ヘルパー等介護職、研究者等から公にできないような現場の話までを聞け、問題の所在や解決策の熱心な議論に接することができ、この上ない考える機会を与えられました。

その後、文部科学省の大学の位置づけも変化し、法人化もあり、現在の都市政策研究所は北九州地域に限定した地域研究と地域交流の拠点と位置づけられています。この過程で、大学院が再編され、社会システム研究科の社会人院生と修士論文を作成することができたのも大きな意義がありました。

略歴に関しては、記録もなく、記憶も定かではありませんが、慣例のようですので簡便に記述して置きます。

1950年3月 北海道出身

1983年 関西大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程後期課程単位修得満期中退

1985年10月 北九州産業社会研究所専任講師

1987年10月 北九州産業社会研究所助教授

1996年 4月 北九州産業社会研究所教授（不確かです）

1988年以降の各種委員等

豊津町高齢者保健福祉計画策定委員会、豊津町介護保険事業計画・高齢者保健福祉計画策定委員会、水巻町高齢者保健福祉計画策定委員会、みやこ町介護保険事業計画・高齢者保健福祉計画策定委員会、中間市職員条例策定委員会、水巻町総合計画策定委員会、筑後市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画等実務者会議、水巻町有償運送運営協議会、北九州市民生局高齢化対策委員会、北九州市小倉南区民生委員推薦会、北九州市いきいき長寿推進協会、北九州市民生委員推薦会、北九州市男女共同参画審議会、苅田町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会等。北九州市社会福祉協議会、福岡県地方自治研究所にも色々お世話になりました。

2006年には北九州都市協会の研究員も加わり、今年度から新入所員も加わるなど、私が赴任した当初からは見違えるように充実しています。

最後になりましたが、私が北九州産業社会研究所に採用されて幸運だったと標題で強調したのは、一貫した事務室の協力支援体制です。調査の手続きや共同研究はもちろん出張や業者への委託契約など全てにおいて支援していただきました。心から感謝いたします。

赴任した当初の印象深い話に終始してしまったことをお詫びするとともに、都市政策研究所の地域研究と地域交流の今後の充実を祈念しています。記録を参照せずに、記憶のみによる記述ですので、事実と反する部分があるかも知れません。ご容赦下さい。